遁世

八幡政男

ここに収めた数篇は、いつかまとめて本にしたいと思いながら、つい、日が経ってしまった。昔の作品をいまさらという気がしないでもないが、おもいきって出すことにした。

表紙の絵は、息子が描いた。

昭和五十一年浅春

八　幡　政　男

遁世・著者八幡政男　三鷹市大沢四丁目六の五〒一八一電話〇四二二(三二)八五七四番　昭和五十一年二月一日刊　印刷発行者高橋一市三協社　定価参千円

目次

序に代えて　1
天　11
名声　101
刑罰　141
遁世　163
棺の声　193
跋　231

序に代えて

――小説孔子縁起――

ちかごろ中国の「批林批孔」運動は下火になったようだが、昭和四十八年八月の十全大会（中国共産党第十回全国代表大会）前後から、毛沢東主席のタクトによって、孔子批判運動が起り、大衆活動にまで発展して中国全土に及んだ。

孔子の「仁」「礼」に代表される儒教思想は、奴隷制を固定化して貴族の天下をとりもどそうとする反動思想であり、秦の始皇帝の「焚書坑儒」は、反動派に対する革命的打撃であったと再評価するのである。

だが、この孔子批判は「孔子の思想を利用して反毛のクーデターを企てた」劉少奇や林彪を追放した理由づけであり、中国独自の社会主義社会建設のための整風運動である。謂わば中国指導者の主導権争いの道具に使われたにすぎない。さればこそ専門の学者が何も言わないのは当然で、第一、「仁」とは何か、「礼」とは、といっても、一口に規定できるものではない。昭和四十四年暮の朝日新聞で、石川淳氏が、論語開巻第一の「学ビテ時ニ之ヲ習フ」について、学とは礼のこと、祭祀の儀式、時ニ習フとは、儀式の演習であると説いておられたが、礼

ひとつとっても、いろんな解釈がなりたつ。

また、例の「由ラシム可シ。知ラシム可カラズ」にしても、何晏の古注や、朱子の新注で明らかなように、決して鄭玄の説のような愚民政策ではない。

本来、思想が党の指導や統制によって秩序正しく生れるものであろうか、まして、ベートーベンやシューベルト、モーツアルト、さらにシェークスピアの作品までヤリ玉にあげての「批林批孔」運動が、芸術の領域にまで及ぶものかどうか、考えるまでもないことである。私の目にふれたかぎりの識者の論調では、「紅旗」や「人民日報」の内容の批判的紹介にとどまったものが多く、肯定的な意見がなかったのも当然である。

尤も中国という国は革命によって脱皮する体質の国であり、文化革命の淵源はすでに「孟子」にみられ、胡適や魯迅に継承されて、現代では政府の手ですすめられているにすぎない。けだし、いつの時代でも偉大なる人物はつねに歴史の批判にさらされるのだ。

前置が長くなったが、私のこの小説も、一種の批孔的発想に基づいていることは読んでいただければわかると思う。しかし、いうまでもないことだが、批判や諷刺のない文学は文学ではないが、イデオロギーに支えられたいわゆる主人持ちの思想は芸術にならない。

孔子を主人公にしたものをかくといっても、じつのところ、どうしても孔子でなければならぬ、というわけではないのである。老子や荘子のほうが、私自身の好みに合っているかもしれ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ない。あえていうなら、偉大なる思想家としてそそり立つ孔子の人間理解に、私の好奇心が働いたわけである。

世上、孔子は道徳家、理想主義者のようにいわれているが、そうではなく、むしろ現実主義者であった。私が孔子に少しでも魅力を感じるのは、そこである。どのように現実主義者であったか、論語の憲問篇第十四のなかにこんな話がある。或人が孔子に、

「自分に恨みをいだいている人に、恩恵を与えてあげたらどうでしょうか」と問うたのに対し、「それでは自分に恩恵を与えてくれる人にはどうしてあげるのだ。自分に恨みを抱いている人には、公平無私な態度をとればよい、自分に恩恵を与えてくれる人にこそ、恩恵を与えてあげるのだ」と、応えている。

きわめて人間的である。蔣介石は暴に報いるに暴を以てせず、といったが、孔子は、何ヲ以テカ徳ニ報イン、といい、徳ヲ以テ徳ニ報イン、とはっきりいいきっている。徳ヲ以テ怨ニ報いる、という、キリスト教的無差別平等の博愛主義をとらぬところが率直で人間的である。しかも感情に激せず、直ヲ以テ怨ニ報イヨ、と、伝統的な習慣も無視せず、極めて現実的な博愛主義者である。

といって孔子に宗教性が皆無というのではない。「逝ク者ハ斯ノ如キカ、昼夜ヲ舍カズ」は、立派な宗教だし、「五十ニシテ天命ヲ知ル」思想もそうである。神を祀り、先祖を崇ぶ、自然

の運命、天の信仰があった。弟子が疾めば天に祈った。が、宗教でいうところの解脱思想はなかった。「七十ニシテ心ノ欲スル所ニ従ヘドモ矩ヲ踰ヘズ」というのは、解脱の境地に達したからだという人もあるが、仏教でいう「本来無一物、何れの処にか塵埃を惹かん」というような状態ではなく、孔子の道徳は本来無一物ではなく、仁という一物がある。空でなく、実がある。

法然上人は死という絶対の必然に対して「往生」という自発的なよろこびをプラスすることを発明したが、往生が往生であるかぎり、庶民は言葉の魔術にかかるわけである。親鸞が、周知の「善人なほもて往生をとぐ、いはんや悪人をや」は、論語の「徳ヲ以テ怨ニ報イ」ることに通じるのではあるまいか。尤も親鸞のこの悪人正機の思想は、東国布教で悪をなさずには生きられぬ農民、商人などに多く接して到達した悟りらしいが、このパラドックスは、深遠すぎて、果して万人に受け入れられるか、どうか。しかしながら今日横行する似非宗教家に比すれば、一生不犯の戒律に敢然と挑戦した人間親鸞は立派である。

とはいえ、宗教は所詮、神や仏の教えであるに対し、儒教は人間の教えである。神や仏という絶対者の声を藉りて説くのではなく、あくまで人と人の対決である論語の思想のほうが、私にはおもしろい。非現実を排し、あくまで現実ととりくむところが。

ところで中国のむかしをかくにあたって、いちばん難渋するのは文献史料の入手である。鷗

外が随筆「歴史其儘と歴史離れ」（大正三年「心の花」）の中で、史料の中の「自然」を尊重するといい、また、

「現在の人が自家の生活をありの儘にかくのを見て、現在がありのままに書いて好いなら、過去も書いて好い筈だと思った」と、作家の態度をのべているが、私もおなじ気持である。史料の説明や解釈は分れても、てがかりさえあれば、作者独自の視点で、事実を枉げても自由に扱うことができる。事実といっても、二千五百年も前のこと、何が事実で、何がウソかわかったものではない。要は作家は真実を追求すればよいのだから。ただ、それをよいことに史料の踏査を怠ってはなるまい。

それにしても、小さなデテール一つもない、という場合が困るのである。孔子については、論語をはじめ、史記の孔子世家、家語、老子、荘子、左伝など、しらべるにこと欠かない。また、研究書も無数といってよいくらい、ある。ところが、その妻については、明快な記録がないのである。

孔子の先祖数代前から、没後の今日まで、直系の子孫が連綿とつづいており、（七十四世の孔徳成は台湾台中市の博文館長だった）批孔運動以後はどうかしらないが、戦後中共治下になっても、その廟堂は大事に保護されている、ときいていた。それなら、孔子夫人については当然、先人によっても考証されているものとばかり思っていた。孔子の母、顔徵在についてもく

わしいし、兄姉などのこともわかるのに、ひとり妻のことのみ、不明なのは、どうしたことか。

中国人名辞典をはじめ、各種の辞典、孔子年譜類、論語の研究で著名な学者幾人かに伺ったが、即答はえられなかった。どこに生れ、何歳で嫁し、いつ死んだか、離婚説（礼記檀弓篇）もあるが、その理由や時期、子供は何人あったか、など、皆目わからない。この疑問に憑かれて、文献を渉猟したが、今もって正確には名前さえわからない。

家語本姓解には「孔子年十九、娶レ於二宋之幵官氏一」とあり、二十一歳、長男伯魚が生れたこと、娘も生れて、弟子の公冶長に娶わせたこと（論語公冶長第五）などは、はっきりしているが、離婚したとしたら、この二子が共におなじ母親なのか、再婚したのか、しないのか、わからぬことばかりである。

五年ほどまえの文芸春秋の「歴史もよやま話」という座談会記事の中で、孔子の母が妾だったとか、口うるさかったので細君に逃げられた（出妻）などが話題になった。（出妻の出は必ずしも逃げるという意味ではない。離婚のことを、放・棄・逐・出・去などといい、何れも夫の一方的意思によった）

逃げだした時期はわかりますか、と司会者が問えば、わからないですね、と邱永漢氏はあっさりいい、宇野精一博士さえ、孔子が十何年あちこち歩きまわって、家をるすにしていたころ

だろう、といったり、弟子の顔回は母の苗字と同じだから、自分の甥かなにかではないか、とおっしゃる。新説ですね、と司会者が感嘆すると、証拠はなにもありません、といった具合である。

孔子出生の秘密については、両親が野合の結果、生れたことになっている(史記・孔子世家)ので、私生児のようにいうが、父の叔梁紇は九女を遺して妻に先立たれ、老年になって後添に孔子の母を迎えたのであり、徵在は進んで嫁したといわれている。要するに年齢の不釣合を、野合といったのである。

孔子が気むづかしかったり、衣服や食物にもうるさかったこと、勇士の子らしく、容貌魁偉、身の丈九尺六寸、酒や量なし、といわれた巨人であったことなどは、夙に知られている。

曩の離婚説だが、礼記檀弓に「伯魚之母死、期而猶哭、夫子聞レ之曰誰与哭者。門人曰鯉也。夫子曰、嘻其甚也、伯魚聞レ之。遂除之」とあることから、「論語正義」の劉宝楠などは、離婚説に解釈するのである。

なるほど、自分の母が死んだとき、慟哭し、三年の喪が明けても尚嘆き悲しんだほどの孔子が、妻の死に際し、子が一年の喪が過ぎても悲しむからといって、叱りつけるのはおかしい。妻を憎んで、とも解されるが、それを駁して、孔子が伯魚にその母のために喪に服さしめたのだ、という説や、孔子自らが出妻に喪したのだという説もあり、何れも肯けるので、ますます

わからなくなる。するうち、宮内庁の内閣文庫で角田九華の「孔子履歴考」の埃をたたき、例の家語の「娶於宋之幵官氏」を解釈した一文を発見した。

主として幵の字の考証であり、幵官、元官、亓官等の出書をあげている。みているうちに私の注意を惹く個所にでくわした。曲阜孔廟の韓勅礼器碑文に「幵官聖妃在安楽里云々」とある。歴史地図でみると、安楽里は曲阜県境であり、そうなら、魯人ということになり、宋人説と対立する。わくわくしながら読みすすむと、さらに、

「……六十七歳夫人亓官氏卒、並易レ幵為レ亓、則又何也……」という一行に当って、私の胸は躍った。これまで孔子の妻の卒年はどこにも見当らなかったからである。謎の一つがとけた感じであった。尤も、卒年がわかっただけでは、それまで孔子と同居していたとはかぎらないと、冷静になって読みかえしているうちに、六十七歳は孔子自身であることに気がついた。とんだ誤読であった。

あきらめきれぬ思いで、国立国会図書館で古代の風俗史や婚姻史、家族法なども調べてみたりした。古代の婚姻形態といっても、ギリシャや日本でもそうだが、母子相姦、兄妹相姦さえあり、また、地主や富豪の間では、二人妻、三人妻が許されても、妻を娶ることのできぬ貧しい農民などは、他人の妻を賃借りしたり、離婚すれば労働力を失い、子をつくる道をなくしてしまうので、妻の姦通も夫は見逃さざるをえない場合さえあったらしい。孔子の結婚について

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

も、当時の社会風俗から類推できないでもないような気がしてきた。

その後、角田九華の一文にヒントをえたので、「古今図書集成」の氏族典中の亓姓をひいてみた。だが、亓州名見姓苑とだけ。それなら、と音韻から推して、亓はその音、其。幵は堅である。其、堅の音通から手がかりはと探したが、これも望みなし。古今図書集成は清朝に成った百巻ものの、いわば百科辞典のようなものだが、乾象典、歳功典、暦法、職方、山川、交誼、氏族、閨媛、神異、芸術（卜占）などに亘り、かなり詳しい。こんどは家範典夫婦部をみた。方都秦という人の「孔門出妻弁」というのがあった。厚い壁がくずれ、一条の光明がさしてきた思いで、眼を皿にしたが、結果はお寒いかぎりであった。方都秦は礼記檀弓の出妻説を駁して、

「孔子ハ聖人人倫之至也、類ヲ出デ萃ヲ抜ク者也」

と、手放しで賞めたたえ、さらに曰うことには、孔子自身が、

「夫婦之道久シカラザルベカラズ、男女ハ正ニ天地ノ大義也」といっている、かかる聖賢の人自身が離婚などするはずがない、と全くの感情論に終始しているのである。私に言わすれば聖人とて人間、愛欲の悩みがない、と言うほうがおかしい。

「かくすは聖人、せぬは仏」

のたとえどおり、戒律きびしい仏家に風紀問題が取沙汰されるのが世のならい、である。さ

ればこそ親鸞も、

「凡夫なればとて、何事も思ふさまならば、盗みもし、人をも殺しなんどすべきかは。もと盗み心あらむ人も、極楽をねがひ、念仏を申すほどのことになりなば、もと僻うだる心も思ひなほしてこそあるべきに、そのしるしもなからん人々に、悪、苦しからずといふこと、ゆめゆめあるべからず候」と、さとすのであろう。

私が孔子を拉し来って小説にする所以のものはすでに評価の定ったものの裏を、あばこうという悪趣味ではない。毛沢東は孔子の「仁」は反動思想だというが、孔子の学問の目的は、夏、殷、周三代の伝統文化の粋を集大成し、それを基盤として、新しく人類永遠の理想を追求し、これを現世に実現するにあった。この理想を仁といい、いうならば伝統的儀礼に対する革新であった。

最初に述べたように、人間孔子の発掘が目的である。孔子の妻が歴史の表面にあらわれない理由を、小説家の眼で解剖しなければならぬ。やはり理由があるはずである。古くは妲己、褒姒。下っては楊貴妃など、歴史上に名を止めた女性は多い。ひとり孔子の妻のみその名さえわからぬというのはどうしたわけか。あまりにも偉大なる孔子の名の蔭にかくれたためか。

例を、孔子夫人という一事にとってみても、歴史の事実を探る作業は日暮れて道遠い。

天

「自分は……」と、十七歳の少年孔丘は嘆息した。「両親の野合の結果生まれた子だったのか」孔丘は絶望的につぶやいた。自分のすべてが終わった……。孔丘は両脚を大の字に投げ出して仰向けに寝ころび、眼は瞋恚に燃えたように、壁の一点をみつめたままであった。母徵在の死。葬儀。慌しかったここ数日の疲労よりも、己の出生の秘密を知った衝撃の方が大きかった。徵在の棺は、昨日、亡父叔梁紇の眠る防山に合葬したばかりである。「仲尼よ」と、死の床で、徵在の目が呼んだ。孔丘は急ぎかしこまって耳をよせる。血の気の失せた唇が、かすかに動いたが、蚊ほどの声も出ない。喉が不気味に鳴り、喘ぎがはげしかった。

孔丘は徵在が息をひきとってからも、棺を祭壇に置いたまま、いつまでもそれにとり縋って号泣した。

「丘よ、いつまで哭いても、死者の魂は還らない。手厚く葬ることが、なによりの孝というものじゃ」

みかねた長老が、半ば叱咤するように声をかけた。

「おまえの父親の墓は防にある。そこへお母さんを葬っておやり」

こんどはいたわりの声音であった。

「えっ」孔丘は言葉がつまった。これまで何度きいても教えてくれなかった父の墓處が、故山の防にあるというのである。それではさっき母がなにか言おうとしたのは……。

「そうだ。だが、まだおまえに言っておくことがある」

長老は語調を変えて孔丘の眼の色を抑えた。

「おまえの両親は天も祭らずに、男女関係を結び、祖宗の霊にも告げず、おまえを生んだ。おまえはそうした両親の罪を浄めるためにも、己を慎しみ、道を修めねばならぬ」しかも腹ちがいの姉九人、片輪者の兄がまだ一人、防にひっそりとくらしているというのである。

正に晴天の霹靂だった。膝がふるえ、容易に立ち上ることができなかった。

柩車の轍の音が門前で止み、喪服の参会者にうながされて、ようやく孔丘は軀を起した。だが、家から三十里の道を、舞い上る黄塵にまみれながら柩によりそって歩く孔丘の頭は、終始霑れなかった。

「おまえは、わたしが尼丘山に禱って妊った子なのだよ。それで仲尼とつけたのだよ」

徵在が口ぐせのようにいっていたのも、裏をかえせば、この罪の意識がさせたのか、それを自分は真にうけていた。処女が天帝の精をうけて子を生む——何の疑いもなく、信じていた。考えてみれば、それは愚かにも滑稽なことだったのに。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com